

# 近松没後義太夫節初演作品一覽(下)「未定稿」

神 津 武 男

はじめに

本稿は、前稿「近松没後義太夫節初演作品一覽(上)「未定稿」」(本誌第三号所載)に続く、後半部分を収める。整理の対象は元号「享保」から「嘉永」までの、およそ百三十年間。前稿には「宝暦」まで、本稿には「明和」から「嘉永」までを収めた。

前稿では、①「義太夫節初演作品の数」は従来、通し本の残る作品の数を以て想定されてきたこと、②その数は、およそ七百前後と捉えられてきたこと、を確認した。筆者はこのたびの整理によって、近松没後の、義太夫節の初演作品で通し本(いわゆる丸本)の残るものを、四百四十と数えた。

本稿では、整理にあたって気付いたこと、いまなお判断に迷うことなどを述べて、大方の御批判を賜りたい。

## 一、通し本以外の「浄瑠璃本」

四百四十とは、義太夫節の初演作品で、板本の「通し本の伝わる作品の数」である。64頁23行目以下に示した四種類、

- ①「上演との関連不明の改題本」十二点、
- ②「読本浄瑠璃」十点、
- ③「写本」二十点、
- ④「歌舞伎」四点、

の計四十六作品は、含めていない。

「初演作品」ではない(①②)、「板本」ではない(③)、「義太夫節」ではない(④)との理由で、右の四種類を四百四十とは別に数えた。

以下、四種類の分類の意味を説明しておきたい。

「上演との関連不明の改題本」は、四百四十のいずれかを単に改題したもの。重複して作品番号を与えることを避けるため、別立てとした。上演記録の確かな改題作品については、当該年月位置に「↓」を頭に付して示したが、上演の確証のない——当該改題名での上演記録の残らない——作品をここにまとめた。

ただし「改題本」005「わらひ草」、同012「浦島一代記」を除くと、すべて江戸諸座の初演作品である点には留意する必要がある。「義太夫年表 近世篇」の博捜を以てしても、江戸の番付は僅かしか確認されていない。江戸の番付の残存状況の悪さ——京都・大坂に比べて——を思わねばなるまい。

しかしその改題本の板元をみると、鱗形屋孫兵衛(改題本「006」007)、上総屋利兵衛(「改題本」004、010、011)、中山清七(「改題本」001、003、008)の三軒に限られること、中山はよく改題/後摺本を刊行したとされる板元であることを勘案すると、改題によって新本を装った後摺本である、と考えておくことが妥当であると思われる。そのため、リストには「板元に拠る改題」と注記している。

「読本浄瑠璃」には、『外題年鑑』に同項目名(「読本浄瑠璃」)で列挙された作品をまとめた。上演を前提とせずに書かれたもの——読むためのもの——を意味する用語と考えられるので、すなわち「義太夫節の初演作品」ではないため、これを除いた。しかし、かつて上演されたことのある作品の改題本が「読本浄瑠璃」に含まれている点が、興味深い。

たとえば安永七年の「相生轡の松」は、寛延元年九月初演「住吉誕生石」を改題したものであった。この原作/改題の関係はすでに、『京都大学蔵大物本目録』には指摘されていたのであるが、『年表』は触れていない。原作/改題の認定は気付くかどうか、複雑な考証を要さないものであるだけに、見落としやすいと思われる。筆者の気付かぬ点を御叱正願いたい。

「写本」には、板本が残らず、写本のみ伝わる作品(一段物は除く)をまとめた。「写本」014「播州皿屋敷」は番付も残り、上演されたことが確かであるが、その他は上演の有無は定かでない。

写本という性格上、「写本」002「戯浄瑠璃壺被語」に二冊あるほかは、いずれも孤本である。ただし筆者の調査の及んだ範囲に限られるため、さらに調査を重ねていけば、別本や、もっと多くの作品をここに加えることが出来るであろう。調査範囲を広げる必要がある。浄瑠璃本の所在情報の御教示、願わくば閲覧までの御高配をお願い申し上げたい。

「歌舞伎」には、浄瑠璃本の体裁を借りながら、歌舞伎の台本を刊行したものをまとめた。なお「歌舞伎」002『競伊勢物語』に関して、二〇〇三年十月国立劇場歌舞伎公演を契機とするなどして、『歌舞伎 研究と批評』33誌上に、いくつかの論考が発表された。しかしながら、その原拠に「写本」001『万葉女阿漕』が存在する、との千葉胤男氏の指摘を取り上げたものが無かつたことは、浄瑠璃研究の立場からみると、いささか残念に思われる。

以上、「義太夫節の初演作品」の、板本の「通し本の残る作品」の周辺にある、四種四十六作品について、概説した。次に、「初演作品一覧」上下において施した例外処理について述べておきたい。

## 二、「近松没後義太夫節作品一覧」の例外処理

「初演作品一覧」は、板本の通し本の残るものを数えたものであるが、二作だけ、写本を数えた例外がある。

「享保」062『南蛮鉄後藤目貫』と、「明和」057『太平頭簪飾』である。二作はともに、上演禁止となつて通し本の刊行をみず、写本で流通したこと、

・ 数年を経て、部分的に書き替えた改題作品が上演された（前者は「宝暦」018『義経腰越状』、後者は「天明」003『鎌倉三代記』と改められた）、  
・ という点が共通する。

いずれも大坂の陣を扱った物語が上演禁止となつたという点に、当局の検閲と浄瑠璃興行界との極限的な関係を示す事例として浄瑠璃史上、また前者は並木宗輔、後者は近松半二という二大作家の研究上、欠くべからざる重要な作品である。また残された写本などによって、初演本文がある程度、復元／想定することが可能でもある。この点を考慮して、特に作品番号を与えた。

次に、通し本に準じるものとして、いわゆる段物集を数点含んでいる点をお断り申し上げる。「宝暦」022『庭涼座鋪操』、同024『庭涼座鋪操』、同027『年忘座鋪操』、同062『新舞台咲分牡丹』、同063『新舞台扇子錦木』、「明和」036『初槽操目録』、同077『三拾石燈始・桂川恋の柵・乱菊枕慈童』、「安永」004『とりあえず見取浄瑠璃』、同005『大海探往來』の九点である。

前四点は新作もしくは改作部分を含むが、後の五点は旧作を寄せ集めたものである。後五点に作品番号を与えることは、重複して数えることとなつて、不統一な処理かとも思う。しかしながら、これらも当該興行にとつては、上演本文の全文を収めて刊行したという意味において、通し本（丸本）なのである。通し本の残存点数を明らかにする目的で、番号を与えた。

次に、これは前稿にも述べたが、『年表』が浄瑠璃本の伝存不明とする作品——筆者

も伝本未確認のもの——については、リスト中に、行の頭に「↓」を付して作品名を掲げ、当該作品への大方の御留意を願つたものである。

本稿も同様であるが、この処理は天明年間までに施したものであることを、お断りする。寛政以後は、通し本の現存する作品のみを掲げている。これは数多の「↓」行の中に、作品番号付きの行が散在する見にくさを避けたためであるのと、もう一つには、旧稿「寛政以後、初演作品年表」に代用可能なためである。

「寛政以後、初演作品年表」は、

『年表』第二巻・第三巻上・第三巻下に所収の全興行中の内、当該年月に至つて初出する「作品名」（および「段名」を含む興行）を、書き出して見たもの

で、その作品が新作か／再演（何の改題である）かを記し、加えて通し本の有無のほか、抜き本（板本）と写本の有無を記した。あわせて参照されたい。

## 三、義太夫節初演作品の数

近松生前——近松および同時期の作者——の、義太夫節の初演作品は、どれほどであるか。

まず近松門左衛門の著作を、岩波『近松全集』の収録作品で数えれば、九十六点となる。紀海音は、『紀海音全集』で数えると、五十点。錦文流は、『錦文流全集』で数えて、九点。また『竹本義太夫浄瑠璃正本集』から、作者不明分を数え、三十五点となる。近松・海音・文流、その他を合わせると、百九十点となる。

近松生前・百九十と、近松没後・四百四十を合計すると、六百三十点となる。ただし現在では伝本の所在不明のものもあり、「通し本の現存するもの」であるとか、「板本」の通し本の現存するものに限るなど、さらに厳密に条件を加えていけば、数は若干減少しよう。しかし義太夫節で初演された作品で、通し本の残るものを数えれば、およそ六百三十ほど、とは言い得るであらう。

こうした数字を踏まえてみる時、黒木勘蔵氏の、

約一世紀間に互つて新作された義太夫節浄瑠璃の総数は、著者の知る限りでは無慮六百篇にも及ぶやうである。

との推計の確かさに驚きの念を抱くのは、筆者ばかりでないであらう。

『義太夫年表 近世篇』の作成に関わつた、内山美樹子氏、鳥越文蔵氏、宮本瑞夫氏は、七百台の数値を掲げる。これは、黒木氏編集になる『近世邦楽年表 義太夫節の部』に比べて、『義太夫年表 近世篇』が倍するほどの興行を把握することの結果と思われる。

義太夫節初演作品——貞享から嘉永まで——およそ六百三十という値に、一節にまとめた四十六作品を加えれば、六百七十六。

『義太夫年表 近世篇』には、『近世邦楽年表 義太夫節の部』より多くの外題(上演タイトル)が掲げられている。ほとんどは改題であるのだが、「外題数の多さ」というものについての実感が、六百七十六をやや多目に見積もらせることになったのだと、考える。

### まとめ——「近松没後義太夫節作品一覽」の利用にあたって——

前稿発表後、作品読みの五十音順索引を付すべきことをお勧めいただいた。不便についてお詫び申し上げるが、索引には、『近世篇』索引篇所載、佐藤恵里氏「外題別興行一覽索引」を利用願いたい。

「外題別興行一覽索引」の読み順で検索、初演年月を確認の上、本稿リストの当該元号を御覧いただきたい。年月の配列は基本的に「年表」に従い、年次に疑問のある場合は備考に記す形にしたので、右の索引は、本稿一覽にも有効なためである。

本稿「近松没後義太夫節作品一覽」と、二節に引いた「寛政以後、初演作品年表」を通じて、近松没後、近世期いっばい(慶応四年まで)の、義太夫節の初演作品名をひと通り、書き出し得たように思う。

「近松没後義太夫節作品一覽」には、通し本の残る作品を数えた。次には、安永七年九月「伽羅先代萩」や、天明二年九月「色直当世かこのこ」、同八年五月「国言詢音頭」などをはじめとした、通し本が残らず、抜き本のみ残る作品を確認していく必要がある。しかし筆者の抜き本の調査は不十分であり、大方の御教示を仰ぎたい。

筆者は右の「作品一覽」と「作品年表」の作成を通して、「通し本が出版されなかつただけで、初演作品は案外と多いのだ」と思うと同時に、「新作初演というものの難しさ」を感じる。一見、新作のようでありながら、実は改題という事例が、意外にも多かつたため、である。

人形浄瑠璃文楽に至るまでの、義太夫節人形浄瑠璃の歴史において、新作初演が常態である時代から、初演興行が漸次減少し、再演興行が常態化するようになったことは事実である。しかし断続的であったとしても、新作初演が止まなかつたことも確かである。新作初演を浄瑠璃史上にどう位置付け、理解すべきか。一方の、旧作再演に際して施される添削(増補/削除)とも関連させて、捉える必要がある。

浄瑠璃本(通し本・抜き本、写本)の伝存を確認する作業は、すなわち浄瑠璃史を再構築する基礎作業であると考えている。

注(1) ただし第一世代の作者三人(近松門左衛門・紀海音・錦文流)の著作、および作者未詳の竹本筑後掾(初世義太夫)初演作品を除いた数。

(2) 『義太夫年表 近世篇』では、各元号・各年の補記や、改題の年月の本文位置に配列

されている。本稿の配列の都合上、末尾に一括したものもある。

(3) 中野三敏氏著『書誌学談義 江戸の板本』(岩波書店、一九九五年十二月)所収、「板本・求板」に、

江戸堺町住の中山清七は、本業は芝居関係書の板元らしいが、(中断)「新板」と称して実は求板本を改題するなどの実例を重ねており、その方面では目立つた存在

との指摘がある。

(4) 浄瑠璃本の場合、上演許可が下りていることを前提として、本屋仲間の改めが省略されたのであるが、そもそも上演を前提としない「読本浄瑠璃」の出版手続きはどのようなものであったか。『大坂本屋仲間記録』に、当該諸書の審査記録は残らないようであり、不明である。

(5) 第三分冊、京都大学附属図書館、一九九〇年三月。

(6) 桂米朝師著『続・上方落語ノート』(青蛙房、一九八五年二月)に紹介の同書は、二〇〇三年夏、米朝師より演劇博物館へ寄贈された。寄贈の経過などに関しては、拙稿「おどけ浄瑠璃について」(『演劇研究』第二十八号掲載予定) 参照。

(7) 千葉胤男氏「八資料紹介」(小野小町・玉造お町/万葉女阿漕)について(『近世文芸』第四十二号、一九八五年五月所収)に、

奈河亀助は、「競伊勢物語」の三段目に、本作の三段目を転用した。「放生川」を「玉水」に変え、剣を鏡にかえた。(中略)「玉造村小よし住家」は、春日村小よし住家となし、お蘭の方の代りに紀の有常とし、その他、お町は信夫・佐助は豆四郎とした。それに、「競伊勢物語」の方は維喬維仁の御位争の時代にしたので少将小町の代りに生駒姫・業平が登場する。

(8) 内山美樹子氏「南蛮鉄後藤目貫考」(『演劇研究』第二号、早稲田大学演劇博物館、一九六七年所収)、同氏「太平頭鑿飾」の諸本(『演劇学』第七号、早稲田大学演劇学会、一九六六年所収) 参照。

(9) 義太夫節の浄瑠璃本に関して、「段物集」の語はいささかひろく用いられ過ぎた感がある。道行や景事を集めた本をも、こんにちでは段物集と呼ぶが、これらは近世期には「道行揃」と呼んだものである(大坂本屋仲間記録『裁配帳』一番(五十五)、大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』第九卷、清文堂出版、一九八二年、六十七頁参照)。段物を集めた本に限って「段物集」、道行などを集めた本を「道行揃」と呼ぶべきことを提唱したい。

(10) 拙稿「浄瑠璃本『増・補』生写朝顔話」の成立とその時代——山田案山子と近松狂言堂、文楽翁の浄瑠璃制作——(『朝顔日記』の演劇史的研究——「桃花扇」から「生写朝顔日記」まで——)、「朝顔日記」の会、二〇〇三年一月所収) 参照。

(11) 第一巻から第十二巻までを数える。この内、第一巻から、義太夫節ではない『世継曾我』『千載集』『盛久』三作品を除く。また第十三巻収録分は、初世竹田出雲、文耕

堂松田和吉の著作として数えていたので、除いた。

(12) 海音研究会編、清文堂出版、一九七七年。

(13) 長友千代治氏編。「浄瑠璃篇」上下巻、古典文庫、一九九一年。

(14) 古浄瑠璃正本集刊行会編。大学堂書店、一九九五年。ただし「清水利太夫」(初世義太夫の前名)時代の作品を除いた。

(15) 黒木勲蔵氏著「浄瑠璃史」、青磁社、一九四三年十二月、「結語」五四九頁参照。

(16) 内山美樹子氏「浄瑠璃再発見(一)——並木宗輔の作品と「北条時頼記」のことなど——」(『国立劇場 第一三五回文楽公演 平成十三年五月』パンフレット、日本芸術文化振興会、二〇〇一年五月所収)。

(17) 鳥越文蔵氏「浄瑠璃略史」(『浄瑠璃集』新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇二年十月所収) 五頁参照。

(18) 宮本瑞夫氏編「正本所在目録」(『義太夫年表 近世篇』別巻「索引篇」、八木書店、一九八九年所収)。見出しの総数八百四十三から、伝存不明のもの(『正本未見』「本不出」などと注記) 八十三を除いた数。

(19) 角田一郎氏「書評『義太夫年表近世篇』」(『芸能史研究』第七十九号、芸能史研究会、一九八二年十月所収) は、

『邦楽年表』に比較すると、量の上では興行数が二倍の三六九一、収載番付数が四倍の二四〇四枚、頁数が五倍の四〇五〇頁、巻数が六倍である。

とする。なお本編刊行完了時に述べられたものであるため、補訂篇を含まない。

(20) ただし「浪華名所古跡辻」の読みは、包紙によって、「おほざか」云々と改めた。『年表』の読みは、「なにわ」。

### 【凡例】

一、本稿は、近松没後義太夫節初演作品の、リストである。

一、初演年代順に配列した。

一、記載事項は、「作品番号」「作品名」「作品名よみ」「書誌」「備考」とした。

一、「作品番号」は各元号ごとに、順に数えた。

一、「作品名」は、大字七行本の、内題を採用した(角書は省略)。特に書体をゴチックとした。七行本以外に基づく場合は、備考に注記した。

一、「作品名よみ」は、包紙の振り仮名を記した。番付・絵尺は採用しなかった。

振り仮名無記の文字には、「—」を当該字数分置いた。振り仮名のあとに「包紙(の残る本)の所蔵機関名」、続く( )内に「包紙の板元名」を略称を以て、記した。

所蔵機関名に「板木」とあるは、天理図書館所蔵の浄瑠璃本板木から、包紙などを刷りした『院本表紙包紙集』を指す(三桁の洋数字は、同包紙集の頁数)。

板元略称の詳細は、次の通り。

塩長 塩屋長兵衛

加清 加島屋加島清助

吉宗 吉川宗兵衛

糸源 糸屋平井源助

紙与 紙屋与右衛門

正小 正本屋西沢小兵衛

勝六 勝尾屋小林六兵衛

上利 上総屋利兵衛

森川平八 阿波屋森川平八

森川豊助 阿波屋森川豊助

西宮 西宮屋西宮新六

石渡 石渡利助(上利と同一)

大治郎 大津屋佐々井治郎右衛門

天安 天満屋岡安兵衛

天源 天満屋玉水源治郎

伝吉 伝法屋寺田吉九郎

本清 正本屋玉置清七

綿喜 綿屋前田喜兵衛

菱治 菱屋八木治兵衛

なお題簽・内題に振り仮名のある場合は、備考に記した。

一、「書誌」は、初板初摺の七行本に拠って、①に作者、②に年記、③に奥付の板元名を記した。なお原本に②年記の記載のない場合は、参考のため、作品番号の前に、初演年月を補った。

一、参考のため、翻刻書(戦後に行われた)のある場合、④に書名を略記した。  
一、「備考」は、異板のある場合にその特徴、また改題本のある場合にその書名を記すなどした。

【近松没後義太夫節初演作品一覽】

【明和】

- 001 吉野合戦名香兜 よしのかつせんめいかうかぶと 日本女子大(西宮) ①作者連名 吉田冠子・竹谷平藏・伊藤荷門・多田大吉(終丁表) ②宝曆十四年甲申正月二日(終丁表) ③西宮新六(江)
- 002 須磨内裏弔弓勢 すまのだいりふたばゆんぜひ 国立劇場(天源) ①作者寺田兵藏(終丁裏) ②宝曆十四年申正月上旬(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・玉水源次郎(大)
- 003 傾城阿古屋の松 けいせいあこやまつ 演博(紙与) ①作者 近松半二・竹本三郎兵衛(終丁裏) ②宝曆拾四年甲申正月十七日(終丁表) ③山本九兵衛(京)・山本九右衛門(大)・鱗形屋孫兵衛(江)
- 004 増・補／姫小松子日の遊四段目 ①なし ②宝曆十四年申三月四日(終丁裏) ③山本九兵衛(京)・山本九右衛門(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ※「宝曆」003「姫小松子日の遊」の、四段目改作。横山正氏「増・補／姫小松子日の遊四段目」の淨瑠璃本について(『文学研究』第六十七号、日本文学研究会、一九八八年六月所収)参照。
- 005 官軍一統志 くはんぐんいつとうし 板木 008(空欄) ①作者黒藏主(終丁裏) ②宝曆十四年甲申四月十日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)
- ↓元年四月「祇園祭金閣寺小袖之鏡」 ※伝存不明
- 006 京羽二重娘気質 きやうはふたえむすめかたぎ 板木 008(紙与) ①竹田出雲(内題下)作者 近松半二・竹本三郎兵衛(終丁表) ②宝曆拾四年甲申四月十七日(終丁表) ③山本九兵衛(京)・鱗形屋孫兵衛(江) ※内題下「出雲」を、貼紙で「和泉」と改めた本、埋木で「和泉」と改めた本もある。
- ↓元年夏「乱菊枕慈童」は、「宝曆」009「義仲勲功記」五段目節事。
- 007 敵討稚物語 かたきうちおこなものがたり 板木 008(紙与) ①竹田出雲(内題下)作者 近松半二・竹本三郎兵衛(終丁表) ②明和元年申七月十五日(終丁表) ③山本九兵衛(京)・鱗形屋孫兵衛(江)
- ↓元年八月「名月名残の見台」 ※伝存不明
- 008 増補女舞劍紅楓 そうほおんなまひつるぎのみみぢ 東京芸大図(無記載) ①なし ②明和元年申八月四日(終丁裏) ③八文字屋八左衛門(京) ※同作には他に菊屋七郎兵衛、鶴屋喜右衛門各板が残る。これらは奥付最終行のみを差替えた同板本。包紙および題簽に板元名を示さないで、特定の一軒が単独で開板したものと考へ難い。相板で、摺刷も同時期であろうと推定する。
- ↓元年九月「菊重懸月見」 ※伝存不明
- 009 嬢景清八鳥日記 むすめかげきよやしまにつき 板木 008(空欄) ①若竹笛躬・黒藏主・中邑阿契／輯之(終丁裏) ②明和元年甲申歳十月廿一日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ※「明和」乙酉年正月十一日(終丁裏)とあるは、五段目「追善記念祭」を削除した改修本。
- 元年十一月 010 ニつ腹帯 ①なし ②なし ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ※題簽「追善」二腹帯八百屋の段」。横山正氏「近世演劇攷」参照。
- ↓元年十一月「江戸桜愛敬曾我」 ※伝存不明
- ↓元年十二月「冬桜咲分鋪」 ※伝存不明
- 011 いろは歌義臣整 —うたぎしんかぶと 中之島図(正小) ①作者 黒藏主・中邑阿契(終丁裏) ②明和元年甲申年閏臘月十五日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)
- 012 蘭奢待新田系図 らんじやたいにつたけいづ 板木 008(紙与) ①千前軒門人 作者 近松半二・竹田平七・竹本三郎兵衛(終丁表) ②明和二年乙酉二月九日(終丁表) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④叢書江戸文庫39
- 013 しきしま操軍記 —みさほぐんき 板木 008(空白) ①作者 豊竹応律・並木斎治(終丁裏) ②明和二年乙酉三月十六日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ※「明和」017「和泉式部軒端梅」参照。
- 014 富士日記菅浦刀 ふじにつきしやうぶがたな 板木 009(紙与) ①千前軒門人 作者 並木永輔・竹田平七(終丁表) ②明和貳年乙酉五月十七日(終丁表) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ※のち安永二年正月「達模様愛敬曾我」と改題される。
- ↓二年六月「御祭礼棚閣車操」 ※伝存不明
- 015 内助手柄淵 ないすけてがらのふち 大谷図(森川平八) ①作者 豊竹応律・三笠恵吉・並木斎治(終丁裏) ②明和貳年乙酉七月廿五日(終丁裏) ③阿波屋森川平八(大)・鱗形屋孫兵衛(江)
- ↓二年八月「投頭巾北浜育」 ※上演されず。伝存不明。

016 姻袖鏡 こんれいそでか、み 板木 〇〇 (紙与) ① 千前軒門人 作者 近松半二・三好松洛・竹田因幡・竹田小出・竹田平七・竹本三郎兵衛 (終丁裏) ② 明和式年乙酉九月十二日 (終丁裏) ③ 山本九兵衛 (京)・吉川宗兵衛 (大)・鱗形屋孫兵衛 (江) ④ 叢書江戸文庫 39

↓二年十一月『会狂言役者双六』 ※伝存不明  
↓二年十二月『事始室早咲』 ※伝存不明

017 和泉式部軒端梅 ① 作者 並木齋治・玉泉堂雨夕 (終丁裏) ② 作者 並木齋治・玉泉堂雨夕 (終丁裏) ③ 明和三年正月二日 (終丁裏) ※「明和」〇三「しきしま操筆記」の四段目改作。神津「新出浄瑠璃本『和泉式部軒端梅』の紹介と翻刻——その他、明和前期の江戸人形浄瑠璃新出資料の紹介——」(『沼津市博物館紀要27』、二〇〇三年所収) 参照。

018 本朝廿四孝 ほんてうにじゅうしかう 早大図 (吉宗) ① 作者 近松半二・三好松洛・竹田因幡・竹田小出・竹田平七・竹本三郎兵衛 (終丁裏) ② 明和三年丙戌正月十四日 (終丁裏) ③ 山本九兵衛 (京)・吉川宗兵衛 (大)・鱗形屋孫兵衛 (江) ④ 日本古典全書『近松半二集』

019 小夜中山鐘由来 さよのなかやまつりがねのゆらい 東京芸大図 (吉宗) ① 作者 近松半二・三好松洛・竹田伊豆・並木永輔・竹田小出・竹田平七・竹本三郎兵衛 (終丁裏) ② 明和三年丙戌七月十八日 (終丁裏) ③ 山本九兵衛 (京)・吉川宗兵衛 (大)・鱗形屋孫兵衛 (江)

↓三年八月『扇子合名月座舖』 ※伝存不明

020 太平記忠臣講釈 たいへいきちうしんかうしやく 京大図 (吉宗) ① 作者 近松半二・三好松洛・竹田文吉・竹田小出・筑田平七・竹本三郎兵衛 (終丁裏) ② 明和三年丙戌十月十六日 (終丁裏) ③ 山本九兵衛 (京)・吉川宗兵衛 (大)・鱗形屋孫兵衛 (江) ④ 叢書江戸文庫 39 ※内題下「座本竹田伊豆」の「伊豆」を、貼紙で「文吉」と改訂したものが初摺本。右二箇所を埋木した改修本も残る。

021 星兜弓勢鑑 ほしかぶとゆんせひかぐみ 大阪女子大図 (森川平八) ① 作者 並木永輔・並木才二・浅田一鳥・寺田兵藏・豊竹応律 (終丁裏) ② 明和四年丁亥正月三日 (終丁裏) ③ 阿波屋森川平八 (大)・鱗形屋孫兵衛 (江)

022 四天王寺稚木像 してんわうじおさなもくざう 板木 〇〇 (天源) ① 作者 連名 近松半二・三好松洛・竹田文吉・竹田小出・八民平七・竹本三郎兵衛 (終丁裏) ② 明和四年丁亥五月六日 (終丁裏) ③ 山本九兵衛 (京)・吉川宗兵衛 (大)・鱗形屋孫兵衛 (江)

↓四年五月『源平二張弓』 ※伝存不明  
↓四年六月『夏楓浮名紅』 ※伝存不明

↓四年六月『誓義十三人治郎』 読本浄瑠璃ヲミヨ

023 花軍寿永春 はないくさじゆゑいのほる 板木 〇〇 (空欄) ① 故人 吉田冠子作 (終丁裏) ② なし ③ 山本九兵衛 (京)・吉川宗兵衛 (大)・鱗形屋孫兵衛 (江) ※次項「関取千両幟」の「前浄瑠璃」として合刻。のちに単行される。

024 関取千両幟 せきとりせんりやうのぼり 天理図 (吉宗) ① 作者 連名 近松半二・三好松洛・竹田文吉・竹田小出・八民平七・竹本三郎兵衛 (終丁裏) ② 明和四年亥八月四日 (終丁裏) ③ 山本九兵衛 (京)・吉川宗兵衛 (大)・鱗形屋孫兵衛 (江) ※前項「花軍寿永春」の「後浄瑠璃」として合刻。のちに単行される。

025 咲分赤間関 ① 作者 竹田文吉・八民平七 (終丁裏) ② 明和四年丁亥九月九日 (終丁裏) ③ 万屋保井仁右衛門 (京) ※明和八年四月、読本浄瑠璃『船軍凱陣兜』と改題される。

026 石川五右衛門一代断 いしかはごゑもんいちだいはなし 天理図 (吉宗) ① 作者 友江子・当証軒 (終丁裏) ② 明和四年丁亥十月十四日 (終丁裏) ③ 山本九兵衛 (京)・吉川宗兵衛 (大)・鱗形屋孫兵衛 (江)

027 三日太平記 みつかたいへいき 都立図 (吉宗) ① 近松半二・三好松洛・八民平七・竹本三郎兵衛 (終丁裏) ② 明和四年丁亥臘月十四日 (終丁裏) ③ 山本九兵衛 (京)・吉川宗兵衛 (大)・鱗形屋孫兵衛 (江)

028 染模様妹背門松 そめもやういもせのかどまつ 関大図 (正小) ① 作者 菅専助 (終丁裏) ② 明和四歳丁亥臘月十五日 (終丁裏) ③ 正本屋小兵衛 (大)・鱗形屋孫兵衛 (江) ④ 菅専助全集 1 ※中字十行本『妹背門松』は、古浄瑠璃本を装った重板。

↓五年三月『葵の巻』 写本ヲミヨ

029 梅がえ新地の段 ① 増補作者 蛙文台 (終丁裏) ② 明和五子五月吉日 (終丁裏) ③ 奥欠本のみ残る ※日大図 (奥欠) 一点のみ残る。外題不明。内題に「むめ——しんちーだん」と振り仮名がある。「増補宮園集都大全书」(国学院高藤田小林文庫)巻末の、「京都草紙本問屋美濃屋平兵衛藏版物目録略書」中に、「梅が枝新地段物 竹本千賀太夫直伝正本」とみえる。当該本は、千賀太夫に所属する(京・美濃平板)カ。内容は、おどけ浄瑠璃「浄瑠璃稽古屋」の一種。類似作品に、「増補皿屋舖 四の口」(内題)六行抜き本がある。同書は「かやは町やくしまへ 西宮新六板」で、板元の住所表記から、明和はじめごろの刊行と知られる。「梅がえ新地」と「増補皿屋舖」の前後は未詳。前者の作者「蛙文台」は、江戸の座本・豊竹肥前掾の俳名「蛙文」に

似ることを想うと、後者が先行するかも考えられる。なお『恋女房染分手綱』の増補段としての「浄瑠璃稽古屋」は、これらに遙かに遅れるものと思われる。

030 傾城阿波の鳴門 けいせいあわーなると 国会図(天源) ①作者連名 近松半二・八民平七・寺田兵藏・竹田文吉・竹本三郎兵衛(終丁表) ②明和五年戊子六月朔日(終丁表) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④叢書江戸文庫39

031 よみ売三巴 ーうりみつどもへ 板木30(空欄) ①作者連名 近松半二・八民平七・寺田兵藏・竹田文吉・竹本三郎兵衛(終丁表) ②明和五年戊子七月朔日(終丁表) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)

032 粧水絹川堤 けはひみづきぬがはづみ 演博(森川豊助) ①作者東勇助(終丁裏) ②于時明和五戊子歳相月中五日(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・森川豊助(大) ※のちに読本浄瑠璃『下総国累説』として再板。同再板本を改題した、『粧水絹川堤』も残る(年記「于時明和五戊子歳七月十五日」)(終丁裏)とあるのが特徴。

033 容競唐土断 ①作者 八民平七・並木互文・並木宗子・並木正三(終丁裏) ②明和五戊子年九月吉日(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・瀬戸物屋伊兵衛(大) ※次項『寿館狐馬騷』と合刻。題簽「容競唐土断・寿館狐馬騷/連官三番叟」。

034 寿館狐馬騷 ①作者 八民平七・並木互文・並木宗子・並木正三(終丁裏) ②明和五戊子年九月吉日(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・瀬戸物屋伊兵衛(大) ※前項『容競唐土断』と合刻。題簽「容競唐土断・寿館狐馬騷」。

035 関取二代勝負附 ①作者 八民平七・並木吾文・並木宗子・並木正三(終丁裏) ②明和五戊子九月吉辰(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・瀬戸物屋伊兵衛(大) ※のちに年次未詳『関取二代鑑』(せきとり)にたいかみ 板木30(大治郎)と改題される(包紙・題簽)。

036 初櫓操目錄 ①なし ②明和五戊子歳長月中四日叶(役割) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ※旧板を寄せ集めた段物集。豊竹座初演『嬢景清八鳥日記』三段目のみは新刻。

037 忠孝大鑑通 ちうかうおほいそかよひ 板木35(空欄) ①作者菅専助(終丁裏) ②明和五年戊子九月廿二日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④菅専助全集1

038 傾城浪花をだ巻 ①作者 田中後調・杉田矢直(終丁裏) ②明和五戊子年十月十四日(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・森川豊助(大)

039 廊色上 さとのいろあげ 板木38(紙与) ①作者八民平七(内題下) ②于時明和五戊子歳十一月十九日(終丁裏) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)

040 紙子仕立両面鑑 かみこじたてりやうめんかみ 文楽劇場(正小) ①作者菅専助(終丁裏) ②明和五年戊子臘月廿一日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④菅専助全集1

041 振袖天神記 ふりそててんじんき 文楽協会(吉宗) ①作者連名 近松半二・近松桃南・松田才二・三好松洛(終丁裏) ②明和六己丑年正月廿七日(終丁裏) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)

042 裾重浪花八文字 つまかさねなにははちもんじ 日大図(天源) ①なし ②于時明和六己丑歳二月十二日(終丁裏) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ※のちに六段目のみが抜き刷りされ、『恨蛟鮪』(うらみのさめざや 板木106(天源))と改題される。

043 四天王寺伶人桜 ①作者中邑阿契(終丁裏) ②明和六年丑二月廿四日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④六年二月『平家義臣伝』※伝存不明

044 蝦夷錦振袖雛形 ①作者 玉泉堂・吉田二一・吉田冠子(終丁裏) ②明和六年己丑三月十六日(終丁裏) ③菊屋七郎兵衛(京)・正本屋清兵衛(大)・上総屋利兵衛(江)

045 追善五十年忌 ①なし ②明和六年己丑四月八日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)

046 絹川粟物語 ①なし ②明和六年己丑四月十一日(終丁裏) ③奥欠本のみ残る

047 東金茂右衛門 ①なし ②于時明和六己丑年六月七日(終丁裏) ③菊屋七郎兵衛(京)・正本屋清兵衛(大)・上総屋利兵衛(江)

048 北浜名物黒船噺 きたはまめいぶつくるふねはなし 玉川大図(天源) ①作者菅専助(終丁裏) ②明和六年己丑七月十二日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④菅専助全集1 ※『明和』029『双紋筐菓籠』と合刻。のちに単行される。

049 時代世話女節用 ①作者 玉泉堂・吉田二一・吉田冠子(終丁裏) ②明和六己丑七月十九日(終丁裏) ③菊屋七郎兵衛(京)・正本屋清兵衛(大)・上総屋利兵衛(江)

050 中元噂掛鯛 ちうげんうはさのかけたい 板木32(空欄) ①作者 三好松洛・竹本嘉蔵(終丁裏) ②明和六己丑年七月廿八日(終丁裏) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④『汲古』

- 051 双杖籠巢籠 ①作者 菅專助・中邑阿契(終丁裏) ②明和六年己丑七月廿八日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④菅專助全集1 ※「明和」048『北浜名物黒船噺』と合刻。のちに単行される。
- 052 殿造千丈嶽 とのづくりせんぢやうがたけ 東京芸大図(森川太三郎) ①作者 豊竹応律・黒藏主(終丁裏) ②時永明和六己丑南呂句一(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・阿波屋太三郎(大)
- 六年九月『園生の竹本』 ※伝存不明。ただし天理図板木53の役割と抜き本表紙(年表はこれを「包紙」とする)が残る。役割には「明和六己丑九月廿九叶」とある。内容は、旧作を寄せ集めた、いわゆる見取りの興行。「増補浄瑠璃万歳(そうほしやうるりまんざい)」(表紙)は、同題名の五行本に拠ると、「宝暦」022『庭涼座鋪操』『浄瑠璃万歳』の改作と知られる。
- 053 近江源氏先陣館 あふみげんじせんぢんやかた 天理図(天源) ①作者 近松半二・八民平七・三好松洛・竹本三郎兵衛(終丁裏) ②明和六己丑年十二月九日(終丁裏) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④日本古典全書『近松半二集』 ※作者を埋木して、五人と改め、さらに七人と改めた改修本がある。
- 七年正月『世話両国志』 ※伝存不明。年次は、演博絵尽目録に拠る(年表は、寛政三年七月十五日とする)。
- 054 腰越状 四段目・丸一段 ①なし ②明和七庚寅年正月十五日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ※「宝暦」018『義経腰越状』未完本(三段目まで)に続く、四段目のみの単行本。のちに当該本の前に道行、後に五段目を加えて、三段目本と合わせて完本となる。
- 055 神靈矢口渡 しんれいやぐちのわたし 北大図(綿喜) ①福内鬼外戯作。補助 吉田冠子・玉泉堂・吉田二一(終丁裏) ②明和七年庚寅正月十六日(終丁裏) ③須原屋市兵衛(江)・山崎金兵衛(江) ④岩波日本古典文学大系55 ※のちに安永元年四月『新田社勸請伝記』と改題される。
- 056 往昔模様亀山染 むかしもやうかめやませめ 栃木県立文書館(石渡) ①三冬庵自在著述。連名 吉川晴虹・森竹今日志・玉泉堂(終丁裏) ②明和七年庚寅四月十九日(終丁裏) ③上総屋利兵衛(江)
- 七年五月『曠勝負廓環』 ※伝存不明
- 七年五月 057 太平頭整飾 ※初演興行途中で、上演差留めとなる。同題名での刊行はみなかったものの、板木は完成していて、のちに読本浄瑠璃『花飾三代記』として刊行された(神津推定。推定の詳細は、近く別稿を発表の予定である)。用字は異なるが、同名の写本も残るので、次項に掲げる。なお安永七年二月に京都で『佐々木高綱武勇日記』(写本現存)、天明元年三月に江戸で『鎌倉三代記』と改題上演された。
- 057 太平金兜鍪 ①作者 近松半二・竹本三郎兵衛(終丁裏) ②于時安永三ノ冬(終丁裏) ③写本(演博)
- 七年五月『当世模様昔の断』 読本浄瑠璃ラミヨ
- 058 夏衣裳鷹染 なつあしやうかりがねせめ 演博(糸源) ①作者 寺田兵藏(終丁裏) ②于時明和七庚寅閏六月廿二日(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・糸屋源助(大)
- 059 利生の池水 ①作者 八民平七(終丁裏) ②明和七庚寅歳七月廿五日(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・糸屋源助(大) ※まず上巻のみが単行される。下巻は「于時明和七庚寅歳八月十二日」(終丁裏) から追加上演され、合わせて完本となる。
- 060 けいせい扇富士 ①故人竹田千前軒。作者 玉泉堂・吉田仲二(終丁裏) ②明和七年庚寅八月朔日(終丁裏) ③上総屋利兵衛(江) ※のちに年次不明『増補会稽山』、寛政九年三月『けいせい箱根育』と改題される。
- 061 小田館双生日記 おだやかたふたごにつき 演博(無記載) ①作者 菅專助(終丁裏) ②明和七年寅八月十一日(終丁裏) ③正本屋九兵衛(京)・鶴屋喜右衛門(京)・八文字屋八左衛門(京)・菱屋治兵衛(京)・菊屋七郎兵衛(京) ④菅專助全集1
- 062 萩大名傾城敵討 はぎたいみやうけいせいのかたきうち 栃木県立文書館(破損) ①作者 連名 近松半二・近松東南・三好松洛・松田才一・竹本三郎兵衛(終丁裏) ②明和七庚寅歳八月十六日(終丁裏) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)
- 063 源氏大草紙 ①福内鬼外戯作(終丁裏) ②明和七年庚寅八月十九日(終丁裏) ③山崎金兵衛(江)
- 064 源平鴨鳥越 げんぺいひよりごゑ 板木125(正小) ①作者 連名 豊竹万三・菅專助・中邑阿契・八民平七・豊竹応律(終丁裏) ②明和七庚寅歳九月十九日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④菅專助全集2
- 七年十月『通矢数四十七本』 ※伝存不明。内容は絵尽の角書に「忠臣蔵・武士鑑・忠臣講釈」とある通り、三作の取り合わせ。そのため安永元年四月初演『躰方武士鑑』以前の上演はあり得ない。安永元年四月以後と推定する。
- 七年十一月『所縁の十徳』 ※伝存不明
- 065 魁鐘陣 さきがけかねのみさき 国立劇場(正小) ①作者 菅專助・若竹笛躬・豊菅州(終丁裏) ②明和七庚寅年臘月十五日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④



菅專助全集2

066 弓勢智勇湊 ①福内鬼外戯作・補助吉田仲治(終丁裏) ②明和八年辛卯正月廿日(終丁裏) ③山崎金兵衛(江)

↓八年正月『仮名書平治合戦』 ※伝存不明

067 九州与次兵衛灘 ①作者 竹本三郎兵衛・中邑阿契(終丁裏) ②明和八年辛卯年正月廿三日(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・阿波屋平七(大)

068 妹背山婦女庭訓 いもせやまおんなていきん 東北大図(吉宗) ①作者連名 近松半二・松田ばく・栄善平・近松東南。後見行年七十六歳三好松洛(終丁表) ②明和八年辛卯年正月廿八日(終丁表) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④小学館新編日本古典文学全集77・日本古典全書『近松半二集』

069 角額嫉妬柳 ①作者竹本三郎兵衛(終丁裏) ②明和八年辛卯年五月廿三日(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・阿波屋平七(大)

↓八年五月『艶祝詞太々神楽』 ※伝存不明

070 関取一鳥居 ①作者 玉泉堂・吉田仲二(終丁裏) ②于時明和八年七月七日(終丁裏) ③山本小兵衛(江)・上総屋利兵衛(江)

↓八年七月『色為替曲輪之通』 ※伝存不明

071 濠標浪花筏 みほづくしなにはいかだ 板木320(正小) ①作者連名 梁塵軒・若竹笛躬・中邑阿契(終丁裏) ②明和八年辛卯年八月十日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)

↓八年八月『朝迎三途雲』 ※伝存不明

072 迎駕籠末期茜染 ①作者 竹本三郎兵衛・寺田兵藏(終丁裏) ②明和八年辛卯年八月十四日(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・阿波屋平七(大)

073 本封復昔曆 ほんげがへりむかしよみ 東京芸大図(正小) ①作者 北脇素三・梁塵軒・中邑阿契(終丁裏) ②明和八年辛卯年臘月廿五日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ※年記を埋木して『臘月』とした改修板もある。

074 嗚呼忠臣楠氏旗 ①作者 竹本三郎兵衛・若竹伊輔・八民平七(終丁裏) ②明和八年辛卯歲臘月廿八日(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・阿波屋平七(大)

075 桜御殿五十三駅 さくらごてんごじゅうさんつき 板木324(紙与) ①作者連名 近松半二・栄善平・寺田兵藏・松田ばく。後見三好松洛(終丁裏) ②明和八年辛卯年十二月廿九日(終丁裏) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)

076 雷太郎君代言葉 らいたろうきみかよことは 板木325(吉宗) ①なし ②なし ③七行抜き本(松竹大谷図)。吉川宗兵衛板。

七年十二月以前 077 三拾石燈始・桂川恋の柵・乱菊枕慈童 ①なし ②なし ③鱗形屋孫兵衛(江)・天満屋源次郎(大) ※旧作三点から成る段物集。『桂川恋の柵』(かつらかはこひーし)がらみ 板木190(天源)は、『宝曆』052『曾根崎模様』の改題。年表は奥付の太夫署名から年次を推定するが、疑問。当該本(演博辻町文庫イ14271)の板元(天源)が、これらの板木

を入手する時期は早くとも、明和八年以後のことと推定されるため。なお刊行の最下限は、寛政四年。『寛政』008『三拾石燈始』へ板木流用されるまで、である。

↓明和年中カ『隅田川柳蝶』 ※伝存不明。近松『双生隅田川』の改題。

〔安永〕

↓元年三月『八重一重色数桜』 ※伝存不明

001 忠臣後日晰 ①作者 北脇素三・中邑阿契・豊普州・若竹笛躬(終丁裏) ②明和第九千辰歳卯月七日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ※江戸の重板には、年記「明和九千辰歳九月廿二日」とあって、作者署名がない。

002 新田社勧請伝記 ①なし ②なし ③正本屋九兵衛(京)・鶴屋喜右衛門(京)・菱屋治兵衛(京)・菊屋七郎兵衛(京) ※「明和」053『神靈矢口渡』の改題(一部書替)。

003 驍方武士鑑 しつけがたさふらひかみ 園田女子大図(紙与) ①作者連名 近松半二・松田ばく・寺田兵藏・栄善平・竹本三郎兵衛(終丁表) ②明和第九千辰歳四月廿八日(終丁表) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)

↓元年前半『梅の由兵衛』は、『明和』070『迎駕籠末期茜染』の改題。

↓元年六月『夏繁地取揀』 ※伝存不明

↓元年六月『神形容四海問答』 ※伝存不明

元年八月 004 とりあへず見取浄瑠璃 ①なし ②なし ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)

元年八月前後 005 大海操往来 ①なし ②なし ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ※早大図本一点のみ残る。書入れの配役から、前項『見取浄瑠璃』に前後す

る時期の上演と推定される。

006 千種結旧画舛紙 ちくさむすひむかしゑさうし 板木 258 (正小) ①作者 北脇素全・中邑阿契・若竹笛躬(終丁裏) ②明和第九壬辰歳八月十九日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)

↓元年十一月『天赦種藤若顔見世』 ※伝存不明。外題は演博絵尺集(口1835-19)の書入れに拠る。

007 後太平記瓢実録 ①作者 菅専助・若竹笛躬(終丁裏) ②于時安永元年壬辰十二月廿四日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④菅専助全集2

008 艶容女舞衣 はさすがたおんなままひぎぬ 広島文教女子大図(森川平七) ①作者 竹本三郎兵衛・豊竹応律・八民平七(終丁裏) ②安永元年壬辰年十二月廿六日(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・阿波屋平七(大)

009 嫩榕葉相生源氏 ①福内鬼外誌(跋) ②安永二年癸巳二月三十日(跋) ③山崎金兵衛(江)

↓二年正月『達模様愛敬曾我』は、『明和』014『富士日記菅蒲刀』の改題。天理図に板本現存するも、伝本未見。

↓二年正月『刀屋半七魁初花』は、『宝曆』062『新舞台咲分牡丹』所収の、『双紋刀銘月』を改題したもの。

010 撰州合邦辻 せつしうがつばうがつじ 早大図(空欄) ①作者 菅専助・若竹笛躬(終丁裏) ②安永貳癸巳歳如月五日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④菅専助全集2

↓二年閏三月『しのだ妻今物語』 ※伝存不明

011 伊達娘恋緋鹿子 だてむすめこひのひがのこ 演博(正小) ①作者 菅専助・松田和吉・若竹笛躬(終丁裏) ②安永貳癸巳年卯月六日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④菅専助全集2

↓二年夏・秋頃『乱曲海土玉取』は、『延享』023『万戸將軍唐日記』の四段目もしくは五段目の改題カ。

012 いろは蔵三組盆 ——ぐらみつぐみさかづき 実践女子大図(伝吉) ①作者 近松半二・近松金三・近松東南(終丁裏) ②安永貳癸巳歳七月廿八日(終丁裏) ③鱗形屋孫兵衛(江)・伝法屋吉九郎(大)

二年七月 013 極楽往来運寄初 ごくらくわうらいはちすのよりぞめ 板木 188 (正小) ①作者若竹笛躬(内題下) ②なし ③奥付欠 ※松竹大谷図本一点のみ残る。ただし包紙や、同座の前後の時期の通し本によって、板元は正小であったと推定される。

↓二年八月『高原千疊敷』 ※伝存不明

014 呼子鳥小栗実記 よぶこどりおくりじつき 大阪女子大図(正小) ①作者 菅専助・若竹笛躬(終丁裏) ②于時安永貳癸巳歳八月廿七日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④菅専助全集3

↓二年十一月『三十二相力双鏡』は、『明和』022『蝦夷錦振袖雛形』の改作カ(年表推定)。

015 けいせい恋飛脚 ——こひのひきやく 板木 155 (空欄) ①作者 菅専助・若竹笛躬(終丁裏) ②安永貳癸巳年十二月廿三日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④菅専助全集3

016 前太平記古跡鑑 ①福内鬼外戯作(終丁裏) ②安永三年甲午正月十二日(終丁裏) ③山崎金兵衛(江)

017 性根競姉川頭巾 しゃうねくらべあねがはづきん 文楽協会(吉宗) ①作者 近松半二・栄善平・八民平七(終丁裏) ②安永三甲午年四月六日(終丁裏) ③山本九兵衛(京)・吉川宗兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江)・天満屋源治郎(大)

018 花禰会稽掲布染 はなたすきくはいけいのかちんそめ 園田女子大図(空欄) ①作者 菅専助・若竹笛躬(終丁裏) ②安永三甲午年八月十三日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・鱗形屋孫兵衛(江) ④菅専助全集3

019 鈍駄六一代噺 ①作者 吉田仲二・松貫四(終丁裏) ②安永三年午九月三日(終丁裏) ③転法屋吉九郎(大)・松本屋万吉(江)・上総屋利兵衛(江)

↓三年十一月『役者評判身振操』 ※伝存不明

↓三年十二月『総体北男鑑』 ※伝存不明

020 吉野静人目千本 ①作者 松貫四・吉田仲三(終丁裏) ②安永四年乙未正月二日(終丁裏) ③正本屋小兵衛(大)・松本屋万吉(江)・上総屋利兵衛(江) ※年記を「寛政八年辰正月二日」とする本、「正月二日」とする本もある。

021 鎌倉山緑翠勝閑 ①作者三九(終丁裏) ②安永四年未正月七日(終丁裏) ③伝法屋吉九郎(大)・中島屋伊左衛門(江)・中山清七(江) ※終丁裏の作者署名を「三久戯作」とする本、

